Osaka University Knowledge Archive

Title	平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究
Author(s)	浅野, 敏彦
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57898
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【49】

氏　　名	浅（あさ）　野（の）　敏（とし）　彦（ひこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３２７６　号
学位授与年月日	平成21年６月９日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　蜂矢　真郷 （副査） 教　授　金水　　敏　　准教授　岡島　昭浩

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、平安時代識字層の漢字・漢語の受容について、国語学的に検討するものである。

第一章「平安時代の漢字・漢語研究史と本論文の方法」、第二章「平安時代識字層の漢語受容についての研究」、第三章「平安時代識字層の漢字使用と表語についての研究」、第四章「結語―本論文の要旨と漢字・漢語研究の課題―」からなる（400字詰換算約720枚）。第一章は、第一節「漢字・漢語研究略史」、第二節「漢語について」、第三節「漢字・漢語研究の意義と本論文の方法」、第四節「本論文の構成」からなり、第二章は、第一節「本章の概要」、第二節「仏典音義との比較をとおしてみた景戒の漢語受容について」、第三節「『真福寺本将門記』の訓点をとおしてみた識字層の漢語受容について」、第四節「漢語動詞の構文的位置からみた識字層の漢語受容について」、第五節「意味分野からみた平安時代識字層における漢語受容について」、第六節「避板表現をとおしてみた『今昔物語集』編者の漢語受容について」、第七節「まとめ」、付論「『今昔物語集』天竺部（巻一～五）の漢語語彙」から、第三章は、第一節「はじめに」、第二節「漢字専用文献にみえる平安時代識字層の用いた漢字の概要」、第三節「公家日記の漢字によって表記されていることば」、第四節「表語率と使用率とからみた漢字文における漢字使用の相について―『陸奥話記』を用いて―」、第五節「変動係数・使用率からみた平安時代漢字文献にみえる漢字の層別について」、第六節「まとめ」、付論「『今昔物語集』巻二・五・二七・二九の漢字」から、第四章は、第一節「本論文の要旨」、第二節「本論文の課題」からなる。

第一章は、漢字・漢語についての従来の研究を見た上で、本論文の方法について述べる

ものである。

第二章は、『日本霊異記』、『真福寺本将門記』、『古典対照語い表』が対照とする『源氏物語』『大鏡』などの仮名文、『今昔物語集』における漢語の様相から、また、漢語動詞の構文的位置や、漢語の意味分野から、平安時代識字層の漢語受容について検討するものであり、「漢語の層別化」を基にした方法によって、漢語受容の実相に迫ろうとするものである。

第三章は、公家日記における漢字、『田氏家集』『将門記』『陸奥話記』『日本霊異記』『尾張国解文』『小右記』『権記』『高山寺本古往来』といった平安時代漢字専用八文献における漢字使用について、「平安時代漢字文献対照漢字表」を作成した上で、使用率だけでなく、「表語率」や「変動係数」からも検討するものである。

第四章は、全体のまとめと、今後の課題について述べるものである。

論文審査の結果の要旨

漢字研究については、池上禎造氏、亀井孝氏、山田俊雄氏等以降の研究があり、漢語研究については、山田孝雄氏、池上氏、佐藤喜代治氏、柏谷嘉弘氏、松下貞三氏等以降の研究がある。

本論文は、それら多くの研究を踏まえた上で、漢字・漢語の「受容」の問題として、漢字・漢語を「層別化」しようとするものであり、平安時代の「識字層」において、「理解」されるものであるか、「使用」されるものであるかといった、「日常常用」の程度を検討していて、例えば、漢語について「漢文訓読のレベルに属する」理解語彙的性格の強いものと「日常の書簡用語のレベルに属する」使用語彙的性格の強いものとを分けて行こうとしているが、その方向は全体として評価できるものである。漢語については、山田俊雄氏の「漢字語」の概念も取り入れられ、漢字については、峰岸明氏が「訓読対象漢字」と「書記使用漢字」とを分けて行く方法も参照されている。

漢語について、異訓漢字の検討、訓点からの検討、動詞の述語としてのあり方の検討、「分類語彙表」を基にした意味分類による検討、『今昔物語集』における避板法についての検討など、一つの方法ではなく種々の方法によって、漢語の性格を浮かび上がらせている点がおもしろい。

漢字について、平安時代漢字専用八文献における「平安時代漢字文献対照漢字表」の作成は大きい労力の上に成り立っており、異体字の扱いに苦慮したものと見られるが、それに対する使用率に加えて、「表語率」、「変動係数」による検討は、文献の種類と使用率との関係や、使用率が低くても豊かに用いられる漢字の存在、文献による偏りを明らかにするなど、見るべきものがある。

直接の検討対象とする文献のみならず多くの文献を見ており、また、種々の比較を通して漢字・漢語の性格を検討するのであるが、『色葉字類抄』を始めとして、それぞれに他の文献と比較を試みていることも注意されてよい。

ただ、それにしては各節の結論は淡泊に感じられる。「層」という用語の意味するところは、もう少し明確にしてほしいと思われる。個々の記述に問題のある点もないではない。なかなか困難ではあるが、「識字層」の中の幅に注意する必要もあろう。漢字についての検討と漢語についての検討とが総合されるとどうであるか、さらに述べてほしいところであるが、これは今後の課題であると言うべきであろう。男性・女性、および、「書き言葉的」「話し言葉的」、「「あらたまり」度」、ないし、「日常的」「非日常的」と、「層」を立体的にとらえて行こうとする「概念図」は、おもしろいものであるが、今後の問題である。

いずれにせよ、漢字・漢語の研究は今後とも進展して行くであろうと考えられるが、本論文はその一つの礎となるものと見られる。

なお、2009年５月１日、本論文の審査を行うとともに、学力の確認を終えた。以上のようであるので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。